虚構の住人

Yuukichi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虚構の住人

【Ｎコード】
Ｎ９８４６Ｘ

【作者名】
Ｙｕｕｋｉｃｈｉ

【あらすじ】
??????????
?
?????????????
???
??????
????????????????
??
????????????

幼馴染

秋の夕暮れ。

上空には甘いオレンジのような太陽が彼らを見下ろしていた。

太陽は果汁を溢れんばかりに垂れ流し、茜色が空一面を我が物顔で塗りたくっている。

一迅の生温い風に落ち葉が舞う。

木造造りの民家の扉はどこも閉ざされていた。

夕焼けに照らされた村の外には人の姿はない。

男は青い大型のキャリーケースをぞんざいに引っ張り、枯れ木が立ち並ぶ閑散とした路上に、ガラガラと車輪の引く音を響かせていた。

そのケースの中には一式の着替えと最低限の生活用品が収納されていた。

彼は今日、生まれ育った村から旅立つのだ。

落ち葉で埋めつくされた路面は所々に砂利道と入れ替わり、

小石に引っ掛かる車輪を転がすのは思った以上に苦行であった。

黒のブーツ、深緑のカーゴパンツに青いデニムジャケット、インナ

ーには白のTシャツ、長めの黒髪、のっぺりとした顔に薄い表情をみせる彼の名は坂上隼人という。

隼人のすぐ右隣に肩を並べるように歩く可愛らしい女は道瀬弐奈という。

ピンクの花柄ポーチを腕に掛け、白いワンピースを見事に着こなしたスレンダーなスタイルを持つ弐奈は、隼人より一つ年下の高校3年生の幼馴染である。

「ほんとに何もかも老いぼれた村だ」

隼人は夕陽に照らされ哀愁を帯びた村を見渡しながら悪態をつく。

「早寝早起きがモットーなのはいい事だと思うけど、日が傾く頃に店仕舞いしてさっさと帰宅しちまうなんてやっぱおかしいぞ。まったく、都会のバイタリティー富む生活を見習って欲しいもんだ」

隼人の卑下する言葉に弐奈は負けじと応戦する。

「あら、聞き捨てならないわね。早朝から田畑に精を出してるおじいちゃん達の方がよっぽど活気があると思うわ」

「俺達は老人じゃないんだぜ。若者には若者の在り方ってもんがあ

る。大体、夜は暗くて出歩けないってこと自体がおかしいんだよ」

隼人は数メートル先に立つ微かに白く灯った外灯に群がり飛ぶ交う虫を見る。

広大な土地に、これっぽちの灯りが幾つかあるだけでは村の夜には頼りない。

事実、この村の夜は暗闇一色に包まれる。

夜道を歩いていると小石で躓き転んでしまった、田んぼに堕ちた、野犬に襲われたなんて話を隼人よく耳にした。

村の人口7割を老人が占める村。

視界の悪い夜の村を闊歩する村人はいなかった。

「いいじゃない。夜は早く寝て、朝は早く起きる。早起きは三文の徳って言うでしょ？お日様を浴びる時間がその分多くとれるから伸び伸びとした健康的な充実した一日を送れるわ。無理して夜更かしなんてすることないの。体を悪くするだけ。絶対ここの方が快適よ！」

キッパリと言いきった弐奈はふいに足を止め、路肩の草の茂みに屈み込んだ。

仕方ないので隼人も足も止める。

「都会にはな、綺麗なネオン街があったり、でかい祭りや花火大会もあるんだぞ。弐奈は興味ないのか？」

「あるわ。祭りや花火大会も隣町でやってるわよ。夜でも店は営業してるわ。都会と変わらないわよ」

黄昏色に染まる田舎派の女は都会に全く関心が無いようで、草の茂みに隠れた野良猫を発見し、チッチと喉を鳴らして手を伸ばす。

だが猫は脱兎の如くその身を翻しさらに奥の茂みの中へと消えていった。

「そんな怖い顔してたら人間でもビビって逃げてくぜ」

そう言った隼人の顔をひと睨みし、眉を潜めたまま弐奈は立ち上がる。

「何をそんなに怒ってる？」

「別に怒ってなんかないわ」

隼人の問いに、ふいっと頭を反らして答える弐奈は、真一文字に口を継ぐんでふん、と鼻を鳴して持っているポーチをブンブンと振り回すという、あからさまに不機嫌な態度を見せ付けた。

弐奈が何に腹を立てているかは隼人の充分知るところにあった。

「田舎もんの女は気が短くていかんな。女の子はもっとお淑やかでいるもんだぜ。都会の女はどんなもんなんだろうな」

「……」

機嫌が治りそうにもない弐奈に嫌味を込めて言うと、弐奈はー随分本気で間に受けたらしい、眉根を更に怒らせ、

「私が都会の女より劣ってるって言いたいの？何よ！あなただって田舎もんじゃない！」

と、口から火の出る勢いで捲し立てた。

これ以上の刺激を与えるのはやぶさかでは無いと隼人は沈黙する。

隼人の歩調を合わせるように隣を歩く腹の煮え切らない弐奈は　まだ怪訝そうに眉を潜めていた。

「田舎にだって都会に無い物はまだあるのよ。野菜や魚だって、都会よりは断然新鮮でずっとおいしいと思うの。この綺麗な夕陽だって都会の淀んだ空じゃきっと見れないわ……それに……」

原因は隼人にあるのだろうが、都会と田舎の比較ネタには既に飽きていた。

まだ続けるのかとうんざりしながらも黙って言葉の続きを待った。

弐奈は歩む足を止めて、

「……それにここには私がいるわ」

そう最後に恥ずかしそうに言い付け足して、尚且つ何故か強気な表情を見せる幼馴染の姿を正面からマジマジと観察する。

風に靡く度に百合のような芳香を放つフワリとした栗色の長い髪、丸々と大きな瞳は見るもの全てを吸い込むように惹きつけるダイヤモンドのような輝きを浮かべ、

スレンダーでいて且つ、出るとこは出ている豊満なボディー。

ノースリーブの真っ白なワンピースは爽やかな印象を与える。

田舎に燻らせておくには勿体無いくらいの美麗な女である。

その完成された顔と身体で都会の街を散会すれば忽ちタレントやモデルのスカウトが殺到するに違いない。

隼人はそれぐらいの自信を持って太鼓判を押す事ができる。
そんな弐奈の可憐で、麗しい顔を覗き込んでいると、その頬が紅潮していくのがわかった。
多分夕陽の成分だけではないだろう紅色の頬を、弐奈は隠すようにヒラリと栗色の髪をそよがせ、そっぽを向いた。
頭を振った際、そよいだ長い髪は、ふわりと仄かに百合の香りを持って隼人の鼻を掠めた。

「こっち向けよ。顔が赤いぞ。照れてるのか？」

「て、照れてないわよ。夕陽のせいよ！というか、気持ち悪いからあまりジロジロ見ないでよね」

弐奈は恥じらいを残した顔をこちらへ向け、あくまでこれは夕陽、と強気で言った。
弐奈はお淑やかなその容姿に似合わず意外とアクティブで強情でツンデレな子だ。

「しばらく会えなくなるからな。今の内に見納めとこうと思ってよ」

何の表情も浮かべず淡々と言った隼人はキャリーケースを引き寄せ、歩き出そうとする、そこへ弐奈は隼人の腕を掴んだ。

「何言ってるのよ？見納め？隼人が一人で自立？無理に決まってるじゃない！絶対にできないわ！」

弐奈は慇懃無礼に叱咤し、隼人の腕を強く引っ張る。

「お、おいおい」

揺られた腕にキャリーはバランスを崩して横転した。

弐奈の強張った表情は、口許を半円に開き、目と眉根は決して笑っていないという奇妙造りだ。

「俺は田舎で百姓をするつもりはないぞ。職は都会で見つける」

落ち着いて冷静に会話する隼人とに対し、横柄な態度で物をいうに弐奈。

「百姓なんてしなくていいじゃない！隣町に行けば色々職はあるわ！そうね……事務職なんてどうかしら？内向的な隼人にはすごく向いてると思う、都会なんてそもそも似合わないのよ」

弐奈は掴む腕を大きく揺すりながら、無理矢理な笑みを浮かべて言った。

確かに隼人は陰気な人間だった。

唯一の友達は幼馴染の弐奈しかおらず、そんな隼人を飽きもせず長年付き添ってくれたのは弐奈である。

だがそれも昔の話だ。

隼人は高校に進学してからは、随分社交的で陽気な性格を獲得できたように自分でも思う。

沢山の友達ができたし、部活動もしたし、バイトもした。

教室の隅で一人読書に更けっていた中学時代の自分とは別人のようだった。

高校で得たものは自信という糧になり、真っ当な人間へと成長した証でもあるのだ。

「あのな、弐奈。俺はもう、あの頃のように弐奈の後ろを付いて回る俺じゃないんだ。わかるだろ？」

隼人は、自分の腕を掴む幼馴染に真っ直ぐな視線を向けた。

弐奈は昔と変わってしまったその瞳に、少したじろぐ。

「な、なによ。私から見ればあんたはあんた、昔のままから全然変わってない」

これには隼人も眉根を寄せた。

「だからなんだ？お前には関係ないだろ。いい加減母親面は辞めてくれ」

隼人は冷たく言い放つ。

「何よ！私がどれだけあんたに尽くしてあげたと思ってるの！」

肩を震わせて本気で怒る弐奈に隼人は尚も冷たく、

「俺の人生だ。俺が何をしようと、何処へ行こうと、とめる権利は誰にもない。幼馴染にもな」

と告げ、弐奈の肩の震えが止まった。

「そう……」

弐奈はぐぅの根も出ない。だから弐奈は不貞腐れていることしかできなくなった。

隼人は大仰に溜息を吐き、横転されたままになっていたキャリーを引き起こし、再び歩み始めた。

弐奈も無言でその後ろを歩く。

隼人は背を見せたまま、何も話してくれない。

弐奈は隼人の長く伸びる影に憎悪を込めて畦に雑多する雑草ごと踏みつける。

無言で歩く二人の男女、澄んだ空気にガラガラとキャリーの引く音だけが寂しく木霊し、

その光景は端から見れば小旅行中の若いカップルの痴話喧嘩の成れの果てにでも見えるかもしれない。

だが、弐奈達は違った。その関係は幼馴染であり、それ以上でも以下でもなかった。

弐奈に隼人を留める権限など持ち合わせていないのだ。

気が付けばいつの間にか砂利道は畦道に変わっていた。

ふと隼人が脇に目を遣ると長閑な田んぼが悠々と広がっている。

遠くに連なる山々の谷間に沈みかけた太陽が、淡い夕焼け雲を映し出していた。

郷愁を胸に抱きながらもしっかりその見慣れた景色を目に焼き付け地を踏みしめる。

相変わらず二人は無言のままだった。険悪の雰囲気の中を黙々と歩いていると二手の別れ道に辿り着く。

ここを右に真っ直ぐ歩けば目的の停留所はあり、隼人に迎えのバスが来る。

そこで弐奈は隼人に声を掛けられた。

「なぁ弐奈」

「なに」

まだへそを曲げていた弐奈は何処までも愛想の無い返事をした。

隼人は足を止める。

突然停まるキャリーケースの車輪に、弐奈は足を引っ掛け転びそうになる。

「いきなり止まらないでよ！転ぶところだったわ」

弐奈は口を尖がらせていったが、振り返った隼人は優しい微笑みを浮かべていて、普段みない幼馴染の表情に思わず見惚れてしまった。

「寄り道しようか？」

差し伸べられた隼人の手。

え、っと弐奈は口を吐き、頬に熱を帯びるのを感じて慌てて目を背け、目を白黒させる。

「な、なに？バスが来るんじゃないの？」

視界を宙に旋回させる挙動不審な弐奈を見て、隼人はクツクツと笑う。それはいつもの笑みだった。

「まだ時間はある。ほら、いいから手ぇかせ」

「ど、どうしたのよ、変よ隼人。怒ってたんじゃないの？手を繋ぐの？え……ぇ？」

しどろもどろに言う弐奈にお構いなしで隼人は小さな手をとり、引き寄せた。

勢いで隼人の胸に顔を埋め、慌てて半歩の距離をとる。

「俺は元から変で、怒ってんのは弐奈だ」

隼人はいつも調子で減らず愚痴を叩く。

弐奈は隼人と手を繋ぐという行為に、恥ずかしさのあまり頭からは煙を吹き出しそうだ。

こうして手を繋ぐのは小学生低学年以来だろう。

行くぞ、と短く言う頭一つ分背の高い隼人の顔を弐奈は見あげた。

その顔は夕陽のせいにできないぐらいに赤面している。

そんな隼人に弐奈はくすり、と笑って大人しく手を引かれることに

した。

隼人は別れ道を左折し、少し歩いたところで、畦道から逸れて草叢のを掻き分ける。

繁茂する植物の匂いがする。目の前には山の急斜面が顔を出していた。

隼人は重いキャリーケースを山桜の木に立て掛けると、登ろう、と言う。

それに頷いた弐奈にサンキューと笑うと、

山の勾配した斜面を避け、足の掛けやすい緩やかな斜面を選んで我が物顔で登っていく。

手を引かれるまま苦難も感じることなく、背の低い山の頂上まで登りきったところで弐奈は感嘆を口にした。

「わぁー……綺麗……」

見下ろせば、四方に聳える山に、秋の夕陽は淡い紅蓮を降り注ぎ、そこに赤々と夕だまりを作っていた。

壮大な自然が織り成す絶景である。

「綺麗だろ？俺の一番のお気に入りの場所だ。日が落ちる前が一番

綺麗なんだ」

隼人は隣で大自然の神秘に圧倒され、可憐な瞳を輝かせる弐奈に言う。

「すっごい綺麗！こんな絶景今まで見たことがないわ！ほんとに！」

感極まっている弐奈に隼人は満足気に笑う。

壮大な自然が織り黄昏の絶景を背景に、一輪の花のような美女もまた画になっていた。

「あ……」

そう漏らした弐奈の視線の先にはがっちりと二人の繋いだ手があった。隼人は慌てて手を離す。

「す、座ろうぜ。立ってみるのもなんだしな」

頬を赤らめた隼人に弐奈も頬を赤らめ、

「そ、そうね、座りましょ」

と腰を掛けようとしたところを、

「いや、駄目だ。弐奈の服汚れちまう」

白のワンピースを着た弐奈に気付き隼人は止めに入る。

隼人の腕は弐奈の腰に回っていた。

「わ、わりー」

「……いい」

更に慌てて腰から腕を離そうとすると、弐奈は小さくそう言い隼人の腕を掴んで止めた。

弐奈の大きな丸い目が隼人を見詰める。隼人もその瞳に吸い込まれた。

細く白い腕が隼人の腰に伸びて、回った。

そして優しく抱き締めてくる。

弐奈の身体の温もり。

柔らかい物が隼人の胸を圧迫し、弐奈の息遣いが耳をくすぐる。

フワリと風に靡く髪からは百合の芳香が漂って甘い。

隼人は弐奈の肩をぎゅっと強く抱き締めた。

柔らかな首筋に、小さな肩。細い身体。

共に育った幼馴染の身体は思ったより華奢だった。

隼人の脈はオルタネートスティッキングのように波打ち、鼓動は雷が轟くように高鳴る。

「……あのね、お願いがあるの」

弐奈の囁きに耳がこそばい。弐奈は一拍置いて、

「隼人がここから出ていっちゃうのは、もういいわ、納得した。だったら私も……っ」

弐奈の口に隼人は人差し指を立てて制す。ここから先は言わせない。

「俺も弐奈にお願いがあるんだ」

弍奈は肩越しに言った隼人を半歩後ろに押しやって突き離し、
自分の願いを遮った隼人の切れ長の目を訝しむ目付きでみる。
思ったよりもずっと近い距離にその顔があり、弍奈は既に紅潮した
顔を更に真紅の色へと変えた。
同じように赤らめる隼人の言葉の続きを弍奈は黙って待つ。

「弍奈が高校を卒業したら迎えにきていいか？」

真摯な顔付きで言った隼人の思いもしない言葉に、半開きに口を開
け一瞬茫然とし、弍奈は慌ててその体裁を欠伸のように取り繕う。

「そ、そ、それってプロポーズって受け取ってもいいの？」

「阿呆。まだ何も始まってないじゃないか」

む、と弍奈は膨れっ面をしたが、

「まぁ仕方ないわね。隼人がどうしてもって言うなら行ってやらな
いでもないわ」

そう言って、ふんと、鼻を鳴らす。だが実に嬉しそうな表情をみせる。

どこまでも素直になれない弐奈に対し、隼人は心底嬉しそうにどうしても、と言った。

「あんたの笑みはいつも嘘っぽいのよね。いいわ、しばらく会えなくなるんだし許してあげる。あ、これ」

弐奈は言い、持っていた花柄のポーチをまさぐり出した。

「これ、学校の授業で作ったの。あげるわ」

「ん？」

弐奈の手にぶら下がる何かがあった。

夕陽を背にする弐奈と隼人の間には暗い闇だまりができており、何か、は翳ってよく見えない。

その手からぶら下がる、何か、を受け取り高々と天へ翳した。

陽に晒された何かは姿を浮き彫りにした。

にっこりとした表情を浮かべる可愛らしいクマのぬいぐるみだった。
頭には長いヒモが付いておりストラップに出来るらしい。
クマの手には星型のプレートが持たされており、夕陽に反射して眩しい光沢をみせた。
そのプレートに手彫りで二七と数字が彫られてある。

「ほ〜。器用なもんだな」

「でしょ。夜鍋して作ったのよ」

「今さっき、学校の授業で作ったって言わなかったか？」

「え、あ、そうよ！学校の授業で夜鍋して作ったのよ。ストラップにしてあるから、どこにでも結べるわ」

隼人はなんだそりゃ、と内心で苦笑し、嘘のヘタな幼馴染の頭を撫でてやる。

「で、いかにも女の子が作った可愛らしいーこのクマのぬいぐるみを携帯にでもつければいいのか？」

ずっと頬を染めっぱなしの弐奈はそっぽを向いた。

「ほんと憎たらしい減らず愚痴な奴ね。わかったらさっさと付けなさい」

隼人は言われたようにポケットから携帯を取り出し、さっさとストラップをそこへ結ぶ。

弐奈は携帯からぶらんと垂れ下がるクマを見て満足気に微笑んだ。

「で、この二七ってどういう意味があるんだ？」

「二七よ！ニナ」

「なるほど。でもわざわざ数字にする必要はあったのか？」

「私の誕生日は二月七日よ。覚えてるでしょ？弐奈の名前は誕生日の数字が由来なのよ」

隼人は初めて弐奈の由来を知った。そういえば自分の名の由来を聞いたことが無いと気付く。

「それを私自身だと思って大事にしなさい。頻繁に目にする携帯に身に付けておけば他の女にかまけて私を忘れることもないだろうしね」

要するに、携帯を持つ度に弐奈とその誕生日を否応なく意識させられるわけだ。

これは来春、迎えに戻る際には大きなプレゼントを用意　しておいたほうがいいかもしれない、と隼人は考えていると、

「私を忘れないでね」

弐奈は改まって真剣に言った。

その散々と輝く瞳を持つ幼馴染を忘れることは決してない。

「当たり前だ。忘れたくても忘れられねーよ。弐奈も俺のこと忘れるんじゃないぞ。忘れてたら迎えにきてやんないからな」

隼人は言って、弐奈の身体に再び手を伸ばす。

弐奈は少し動揺して、

「今日だけ特別だからねっ！」

と言って素直に抱き締められた。

弐奈は抱きしめた隼人の肩越しに、眩く秋の夕陽が落とす影を見た。

優しい光に包まれ影を落とす二人の長い影は一対になって伸びている。

そんな夕陽はこの時ばかりは哀愁を帯びてなんかいなかった。

赤から紫に染められた空にはどんよりと曇った雲。

辛うじて山の谷間から尾だけ出した太陽は、仄かに夕陽の灯火を残しているが、間もなくその山に埋没してしまうだろう。

夕闇だった。これからこの空は闇が支配する。

そんな時頃に目的の停留所に着いた。

下山した彼らは再び元の道まで戻り、真っ直ぐ停留所を目指した。
それ程時間は有さなく、余裕を持って到着した。
停留所には広い敷地と一つのベンチと運転時刻版だけというなんとも殺風景なところだった。

「充分に間に合ったな」

隼人は携帯の時計を見ながら言って、キャリーを時刻版に立て掛け、ベンチの埃を手で払う。

「懐かしいバス停だわ」

弐奈はそう言いベンチに腰掛け辺りを見回した。
隣町へ行くにも高校の通学の便に使っているのも、このバス停ではない。
だが、このバス停は三年前、姉の上京の見送りはこの停留所だったのを覚えている。

「ここに来たことがあるのか？」

「一美姉さんを見送る時に来たわ。隼人のように都会、都会って言ってたわよ」

一美姉さんは隼人より7つ年上で、隼人が中学を入学した頃に隣町で一人暮しを始め、以来顔を合わせていなかった。

隼人は弐奈のすぐ隣へ腰掛ける。

「しかし無人の停留所だな。入念にチェックはしたはずだけど」

本当にバスが来るかどうか疑ってならない。

隼人にとっては初めてきたバス停だ。

ベンチの脚は鉄でできており、黄土色に変色し錆びてしまっている。

目の前のアスファルトはひび割れており、路面一面凹とつに勾配しているという有様だった。

ここから都会行きの夜行バスが出るのは可笑しいように思える。

確かに昨日、乗車乗り場にチェックを入れた。

しかしどのようにチェックを入れたかを隼人は思い出せないでいると、

「ちょっと、隼人。引っ付き過ぎよ」

言って弐奈は密着した隼人の身体を押し空間を作った。暗がりの中でも弐奈は頬を赤くしているのがわかった。

「さっき、あれだけ抱き締め合ったのに、今更恥ずかしがるなよ」

「さっきのは特別って言ったでしょ？調子に乗らないでよね」

相変わらずツンツンデレデレしている弐奈である。

「今更だけど、おじさんとおばさんは見送りに来なくて良かったの？」

「ほんとに今更だな。親父もお袋も見送りは弐奈に任せるって遠慮してたぜ」

「べ、別に遠慮することなんてなかったのに」

理解ある親父とお袋に内心感謝したのは隼人である。

二人で綺麗な夕陽を眺めることができたし、約束も取り付けること

ができた。

「麗美も見送りに来たかったはずだけど、遠慮しちゃって、嫌になるわ」

弐奈はプンプン、と頭を振る。麗美とは弐奈の中学生の妹である。

そこで閃いた。

「おもしろいことに気付いたぞ！」

急に声をあげた隼人に、弐奈は身体を驚かせた。

「どうしたのよ。びっくりするじゃない」

「弐奈の二は次女の二番目という意味も含んでいるんだ」

弐奈は、そうよ、と自分のことながら興味も無いように言った。

「さらに、麗美は０３だから０月３日生まれの三女だ！」

言った隼人に弐奈は目を点にした。

「0月って何処の世界の月よ。3月3日生まれよ」

呆れて言った弐奈に隼人は首を傾げる。

「それじゃ名前はミミの方が良かったんじゃないか？」

「私の母親の名前はミミだから、被るのは頂けなかったらしいの」

そういう事か、と隼人は得心し、人差し指を弐奈に真っ直ぐ突き付け、

「一美姉さんは、一番目の一！長女！そして1月3日生まれだ！」

探偵が犯人を暴く何処かの探偵のような姿勢で言った。

「はいはい、ご名答ご名答」

弐奈は白い目で隼人を見る。隼人は一人、謎を暴いた歓びに浸っていた。

「あんたって普段落ち着いてるのに時々馬鹿になるのね」

呆れ口調で言う弐奈に、

「普段から落ち着いてるからこそ、いざという時は面白い奴になるんだ」

隼人はそう言い鼻を膨らませ変顔を作り、弐奈は声をあげて笑う。

「あはははは、何よその顔。やめてよ」

そこへ、轟音を響かせるエンジンの音がした。

奇抜な黄色い大型バスは薄闇の田舎道にその色彩を際立たせ、

眩しい車内灯は夕闇になれた二人の目をくらませる。

大きな車輪は凹とつした道路の上を踏み慣らすように進行し、停車位置に停まる。

ピー

音が鳴り隼人を誘うように開かれる扉。

「行かないと」

立ち上がって立て掛けたキャリーを掴んだ隼人に弐奈は不安気な顔をみせた。

「お姉ちゃんの時と同じバスよ。これに乗ったお姉ちゃんはちっとも帰ってこないわ！」

同じ、というのは色が同じという意味なのだろう。

弐奈は困惑を一杯にした表情で隼人の腕を掴む。

「ねぇ、隼人は帰ってくるわよね！」

迎えにくるに決まっている。自分から望んで取り付けた約束だ。

無下にはしない。隼人は弐奈の小さな頭をわしわしと撫でた。

「心配するな。春になったら絶対に迎えにくる」

何も言わない弐奈の手からは力が抜け、隼人はキャリーを引っ張り背を向ける。

搭乗口に重い足を掛けた。

今なら手を引っ張てでも連れて来れる。
そんな間の差したような咄嗟な思考が浮かぶ。
そして気付いた。これは哀惜ではなく愛惜なのだと。
隼人はこの気持ちを胸に抱きしめ、改めて離郷に決意を固めた。
短い階段を登りきったところで、隼人は共に育った幼馴染の顔に振り返る。

薄暗い闇の中に向日葵のように明るい満面な笑顔があった。

彼にはそれだけで充分だった。

新しい門出にこんなに大事な残し物を置いて行くことはこの上なく心残りであるだが、
都会に馴染んだであろう頃合いには春がやってきているはずだ。
それまでに弐奈に都会の街中を案内できる程に熟知しておかなくては。

ピー

そんな私情を理解する術もない夜行バスの扉は早々に閉められ、
エンジン音と共に廃棄ガスを吐き、発車した。

小さな無人の停留所には似合わない向日葵の笑顔を残して。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9846x/

虚構の住人

2011年10月28日02時08分発行